

平成 25 年度 終了報告

公立大学がかかえる地域の課題をさぐる

- 公立大学が果たす役割について -

狩野徹

1. はじめに

本報告は、本学部とY大学社会福祉学部との交流事業を通して、公立大学が抱える課題や地域貢献、福祉教育実践上の課題など、共通したテーマについて議論、検討する事業の報告で、学部プロジェクト研究課題「公立大学が果たす役割について」としておこなわれたものである。

Y大学と本学はひとつの学部としての組織を持ち、1学年の定員もほぼ同じ100名規模で、いわゆる大都市に位置するのではなく、地方にある公立大学としての地域の役割があり、似た課題を抱えているということで交流が始まった。

2. 交流事業の概要

(1) 初年度(2009年度)の交流

まず、教員および学生の相互訪問を2009年度におこない、各大学の状況を知ることから始まった。Y大学においてGPの報告会・シンポジウムがあり、本学部の教員と学生がボランティア活動、当時の中越地震に対するボランティア活動の実践を報告した。Y大学から本学部への訪問の際に、学内学会が開催されていて、そこでY大学の学科長が報告をおこなった。このようにお互いにそれぞれがおこなっている活動等に参加し、それぞれの活動を報告することで、共通の認識の形成に向けての一步を踏み出した。

(2) 地域活動の把握

次に、それぞれの学部が大学のある地域で活動している内容について相互視察、意見交換をおこなった。Y大学では、「学生・教職員と地域との交流を深めることにより、地域の教育力と若者のエネルギーを生かし合うことによって、生き生きとした地域社会づくりに資するため」地域交流スペースを開設しているという報告を聞き、われわれは視察した。本学部では学生が授業の一環として地域にも入り込んで学習している西和賀のプロジェクトの紹介と、「学部プロジェクト研究」の中で地域貢献に結びついているものを紹介した。それぞれ立場と活動が異なるが、学生と教員が一体になって地域へ入り込んで活動することが、地域貢献と

学生の教育に効果があることを確認した。

(3) 東日本大震災以降の交流

2011年3月に発生した大震災後、Y大学は本学のボランティア活動に参加し、被災地へ入り、学生のボランティアや教員と現地の活動、特にソーシャルワーク活動をしている人とのつながりを作っていた。この経験やつながりをY大学の地で、コミュニティソーシャルワークなど取り組んでいる活動と関連付けて地域発信をしていた。現在も被災地訪問を行い、被災地でのソーシャルワーク、特にコミュニティソーシャルワーク活動のあり方を学んでいる。

本学部は、実習教育について、実習先との連携や指導方法などについて、Y大学の状況について学んだ。ひとつの県に複数の社会福祉系の学科を持つ大学があるY大学と広大な面積を持ち唯一の公立大学かつ社会福祉系のある本学部との違いを改めて認識した。県内だけでなく近隣県までのつながりがある本学部の地域との関係が教職員の努力によって保たれていることが明らかになった。

(4) 公立大学としての役割の検討

本学部が学科の見直しをしたりY大学が獲得したGP事業などを報告しあったり、双方の学部のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーなどを検討した経緯など結果ではなく途中にあった課題についての情報交換をするなど公立大学としての社会福祉教育の役割や社会情勢への対応など、大学間の垣根を低くした意見交換会を続けている。

短時間で結論の出るテーマではないが、定期的に意見交換をしていること、学生が相互訪問しボランティア活動など地域における活動や実習で得られたことの情報交換など教員、学生がそれぞれ本音で交流できるようになった。また、教員間での共同研究もはじまり、共通のテーマも見え始めている。今後は学生の相互教育、教員同士の地域貢献など公立大学の課題についての共同研究の実施などを模索している。

このプロジェクト事業には、佐藤嘉夫前学部長、遠山学部長、高橋聡教授、藤田徹准教授、藤野好美准教授、岩淵由美助教(以上Y大学訪問者)ほか多くの教員が参加している。